

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第22回 マルク・ベルナベさん マンガ・アニメ翻訳家

「マンガはサブカルチャーではありません。日本発の偉大なポップカルチャーです。」

今回は日本マンガのスペイン語、カタルーニャ語翻訳の第一人者で、バルセロナの翻訳エージェンシーDarumaを率いるマルク・ベルナベMarc Bernabéさんです。マンガとのクロッシングから生まれた日本語、日本との付き合いを語っていただきます。



AMICS 日本のマンガとの出会いからお聞かせください。

Bernabé 小さい時の記憶です。私の世代はアニメでの出会い「マジンガーZ」です。スペイン中が熱狂していたと思います。その頃はすでに、「母を訪ねて三千里」、そして「アルプスの少女ハイジ」もカタルーニャで放映されていて人気が出ていました。ティーンエイジャーになると出会いがどんどん増えました。「ドラゴンボール」「聖闘士星矢」「キャプテン翼」「キン肉マン」「ドクターランプ」「らんま1/2」この時代の作品はとても影響力がありました。

私の場合は、加えてそこに登場する文字への興味が強かったんです。アニメの毎回のタイトルは日本語で出てきます。読めないけど形が面白い。「ドラゴンボール」の悟空の道着に入った「亀」という文字。あれはなにか?めっちゃくちゃ気になりました。

AMICS 日本のアニメがコミックとして出版されたのはいつ頃でしょうか。

Bernabé アニメから本になり始めたのは1990年代です。実質的に最初のブームになったのは「ドラゴンボール」です。コミック化された「ドラゴンボール」の人気は爆発的でした。カタルーニャ語出版物でもドラゴンボールは今でも1位を守り続けていて、カタルーニャではもはや都市伝説だと言われています。

その鳥山先生が亡くなられた時は、カタルーニャでもみな大ショックでした。今、友人は「ドラゴンボール」のインパクトについてTVドキュメンタリーを作っています。全4話の予定で第1話がTV3で公開されたばかりです。この番組を見たらその大きさがよくわかると思います。

AMICS 日本でも勉強されたのですか

Bernabé 大学はバルセロナ自治大の翻訳通訳学部に入りました。ここでは英語以外の言語の一つ取るわけですが、いくつかのオプションから迷わず日本語にしました。ここでマンガやアニメが好き、日本文化と日本語への強い興味に加え、翻訳することが大好きな自分を発見します。この3つの要素が一気に揃いました。まさにこれからの人生の生き甲斐を見つけたようでした。

最初に日本に来たのはこの時です。1999年から1年間、交換留学生として京都外国語大学で学びます。次に1年間、日本政府のJETプログラムに招致されます。日本の地方自治体に海外のネイティブを招き国際交流力の促進を図ろうというプログラムで、私の場合はサッカーW杯の時でした。横浜市役所の企画局コンベンション都市推進課W杯準備室で仕事をしました。それからさらにラ・カイヤの奨学金をもらい3年間、大阪外国語大学で修士課程を終えました。

AMICS マンガの翻訳を始めたのはそのあとですか?

Bernabé 最初の留学から帰った夏です。友人から連絡がありました。TV3が新しくアニメ番組を放映するので翻訳したいが、それまでの翻訳家がみなバケーションで対応できないので探しているというのです。そのアニメ番組…なんと「クレヨンしんちゃん」でした。一番最初の翻訳、それがこれまでの人生で一番人気が出たマンガになったんです。しんちゃんがスペインに入学したのはカタルーニャのテレビからです。今でもすごい人気を保っていて毎年50話くらい新作が出てきます。最初はカタルーニャ語版、そこからスペイン語に翻訳されたんです。しんちゃんの「ぞうさんぞうさん」もまずカタルーニャ語から始まりました。短くてリズムがいい言葉ですから、象の鼻という意味のtrompaを使って「トロンパトロンパ」です。びっくりでしょ?笑。スペイン語の「エ

レファンテ」では音節数が違うので、こうはいかないですね。

AMICS アニメ翻訳の一方で出版社の動きはどうだったんでしょう。

Bernabé 同じ時期、複数の出版社がマンガの出版を始めようとしていました。履歴書を送ったところその2社とも連絡をいただきます。まさに時が味方してくれていました。一つがグレナ社というフランス系の会社で、それまでは日本語/フランス語/スペイン語の順番、つまりフランス語経由で翻訳していたんですが、ダイレクトに日本語/スペイン語でやっていけないか模索を始めていました。すぐに「カードキャプターさくら」と「ドラゴンヘッド」の依頼を受けました。もう1社プラネタ社からは浦沢直樹「モンスター」と手塚治虫の「火の鳥」でした。「モンスター」はいきなり手術の医学シーンがあるし、「火の鳥」は日本の神話を理解しないといけない。どちらも難しい作品でした。

その後、2003年にグレナ社はもう日本語からの翻訳は私と私のパートナーのペロニカに任せたいということになります。相互に翻訳チェックしてきましたが、コミックの人気は最早ふりでは手いっぱいになってしまうほどでしたから、友人たちも巻き込みDaruma社を設立するんです。社名は日本の言葉を使いたい、日本でもカタルーニャでも短くて発音にネックがないものを使いたいと考えました。達磨はカタルーニャ語でもDarumaです。そして「縁起がいい」「七転び八起き」「精神性」「かわいいマスコット性」を感じますから。最初は片眼に日本語、やがてもう一方にカタルーニャ語をはじめ各国語が入るというわけです。他にもビジネスでの見積もりには片眼、合意された請求書には両眼が開くというようにも使ってますよ。笑。

AMICS カタルーニャのコミック作家は現在どのような状況でしょうか?

Bernabé スペインの作家で有名なのはパコ・ロカ。彼はバレンシア出身です。そして日系のケン・ニムラ、ケニー・ルイス、それにファン・アルバランですね。ファンはバルセロナ出身で、週刊モーニング連載中の「マタギガンナー」を作画しています。日本のマンガ業界でアシスタントをしてきたんです。たまたま今日は10巻の発売日です。元々はバルセロナで描いていましたが、昨年からは北九州で描いています。

AMICS バルセロナのイベント「Manga Barcelona」の話を聞かせてください。

Bernabé MANGAは日本のマンガ、アニメということです。1980年代から、欧米のコミックをプロモーションするために「コミック・バルセロナ」が開催されてきました。その団体が日本に注力する形で新たに1995年に「Salon del MANGA」を立ち上げました。今やヨーロッパでのマンガに関するイベントではナンバーワンです。パリでも「ジャパンエキスポ」という形で開催されていますが、歴史ではバルセロナですし、



マンガ・バルセロナのイベント写真

MANGAを冠するのもバルセロナです。来場者は昔は男性若者7割といった感じでしたが、今は女性が多くなり、ファミリー層も増えました。最初の頃の世代がファミリーを持ちグローイングアップしているんです。以前はコスプレの曜日を設けて無料にしたりしましたが、コスプレと言えないような「怠けたコスプレ」(苦笑)が増えたこともあり今はありません。今では日本語教室、日本の食文化、着物などのファッションまでも取り込んだ日本カルチャーを楽しむイベントに育っています。毎年、名古屋で開かれるワールドコスプレサミットへのスペイン代表が選ばれるイベントでもあります。

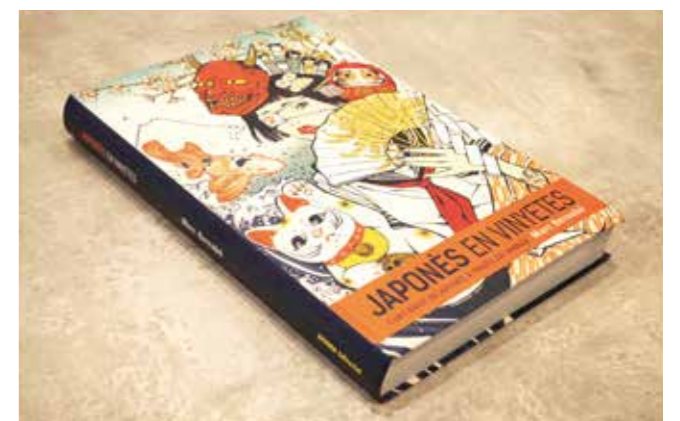
AMICS なぜマドリッドではなく、バルセロナだったのでしょうか。

Bernabé 主催しているのはFICOMICという団体で、出版社、専門

書店、作家で構成されています。その中心は「本」なんです。そしてスペインの主な出版社はバルセロナ、カタルーニャに集中していますし、マンガ、アニメの強いファンもカタルーニャに集中しているんです。スペインでマンガGDPを算出したらカタルーニャが7〜8割になるんじゃないでしょうか。翻訳もカタルーニャ語が増えていて、スペイン語版と共存しています。マンガの読者は州を越え好きな方で読みます。政治ではありません。「進撃の巨人」や手塚治虫の「アドルフに告ぐ」もカタルーニャ語版になっています。

AMICS サン・ジョルディの日を考えると、カタルーニャは本との結びつきが強いんですね。日本とカタルーニャ。今後進めていきたいこと、日本のマンガ業界やファンへのメッセージを聞かせてください。

Bernabé はい、自慢したいものがあるんです。マンガをツールにして日本語を学ぶテキストをつくりました。この「JAPONES EN VINYETES」(コマのなかの日本語)を2001年に出しました。すでにスペイン語版で20万部発行されています。次にカタルーニャ語版を出しました。カタルーニャ語から日本語を勉強するという点では最初で唯一の教科書です。同じように英語版も出しましたし、さらに多言語で出版されています。1990年代、マンガの情報誌に3年ほど続けてきた連載を發展させたんです。日本語への第一歩をこれで学んでいるスペイン人が増えていて、感謝のメッセージをいただきます。今も、これからも日本のマンガやアニメは日本への大きな窓になっています。これはサブカルチャーではないんですね。偉大なポップカルチャー!だということ、日本ではもっと自覚された方がいいと思います。



[AMICSの眼]

日本のマンガ、アニメの発信力は私の想像をはるかに超えているようです。お話しをしているカタルーニャ人のマルクさんに、以前この企画で取材させていただいた故田澤先生がだぶってきました(マルクさん自身、先生へのリスペクトを語っています)。言語が壁を超えクロッシングを進めていく。その現場リアリティーに心が震えました。12月に開催されるマンガ・バルセロナ、その特集を組んでみたいですよ。

(取材/文 原正彦)